エッセイ

日文研三十五周年、という刻印

直木賞は、直木三十五という作家を顕彰して創立されたものだが、この作家は、改名マニアであった。本名「植村宗一」の「植村の植を二分して直木、この時、三十一才なりし故、直木三十一と称す」（「私の略歴」）。そして「三十一から二、三」と改名を続けた。「悪い洒落はよせ」と言われたので「三十三で留めておいたが、三三と重なるのは姓名判断上極悪であるといふ」。そこで「三十三」から「一躍四を抜いて三十五になる」（「改名披露その他」）。最初に引いた「私の略歴」は昭和六年（一九三一）の文章で四十の年。「改名披露その他」はその五年前、『文藝春秋』大正一五年（一九二六）一月号の掲載だ。芥川龍之介への言及もある。

妙なことを綴ったのは、終わりなきウィズコロナと戦争の中で、今年の五月が、日文研の三十五周年であったことからの連想である。私が日文研に赴任した二〇一〇年は、二年後の二十五周年記念行事に向けて、いくつかの事業が、すでに始まっている時期だった。時を経て、二〇一七年五月刊行の本誌『日文研』は、文字通り「創立三十周年記念特集号」と銘打った大冊である。しかし今年は……。いささか無念だが、先に述べた事情で、その盛大な予祝は、五年後の未来、二〇二七年の四十周年へと先送りしたい。

あたかも直木三十五になぞらえて言えば、日文研の「三十三」は、ちょうどコロナ禍が深刻化していく二〇二〇年に相当する。確かに「三三と重なるのは」「極悪」であるようだ。しかしそれも、願いを込めて「三十五になる」今年、二〇二二年で区切りとしたい。直木も改名は、それが最後であった。

本誌にとっても「三十一から二、三」は激動の中にあった。議論を経て「読み物（「エッセイ」

「センター通信」）のみ掲載する号と、読み物プラス前年度一年度分のデータ（「共同研究」「基礎領域研究」「彙報」「所員活動一覧」）を掲載する号とに分けて年二回（三月・九月）発行して」いた編集形態は、二〇二〇年三月の六四号をもって終了。「今後は読み物プラス前年度一年分のデータを掲載」する「年一回の発行」へと変わる（送付文より）。新生の初号が同年九月の六五号で、本号はそこから数えて三冊目。年一回の刊行となってからは二年目にあたる。

さて、アニバーサリーのイベントは先送りだが、本誌は、三十五周年にふさわしい充実したラインナップになっている。たとえば巻頭に掲げた細川周平名誉教授のエッセイは、二〇二二年三月、アメリカ最大のアジア学会ＡＡＳで基調講演をなさった、歴史的に貴重な体験談だ。この基調講演には、二年以上にわたる構想があるようだ。前年三月の同大会では、コロナ禍でＡＡＳの会長を一年長く担当されたクリスティン・ヤノ氏による、チンドン屋の映像を流しながらの挨拶があった。少なからず驚いた。その一月程前、細川名誉教授は、こちらもコロナ禍で延引した退職記念講演を「チンドンの因縁」と題して語っていたからだ。ヤノ氏と細川名誉教授の交流は、文章をお読みいただきたい。二〇二一年のＡＡＳを眺めて、ヤノ・細川対談を日文研でできないかなと夢想し、細川さんにお声がけしてみたことがあったのを思い出す。それが、ずっと大きな規模と企画で実現した。なによりの記念碑的国際日本文化交流として、感慨深い。

その他にも……、と本号の中身を一つ一つ説明したいところだが、やめておこう。拙い私の文章では、銀表紙の貴重な余白を汚し、読者を退屈に導く不毛に陥るばかりだから。書き手はいずれも、さまざまな形で日文研を支える、国際的な研究者ばかりである。一つ「センター通信」として大事なことがある。伊東貴之教授が論ずる、二〇二三年度からの総合研究大学院大学の大統合だ。まさしく日文研と「国際日本研究」の基盤に関わる大問題なので、締めくくりに配置した。最後まで、熟読をお忘れなく。

荒木　浩（国際日本文化研究センター教授）